

初秋に奏でる室内楽の調べ

プログラム

まだまだ暑い日が続いていますが、暦の上では秋。今日は、そんな季節の中、名手たちによる室内楽の名曲でお楽しみください。

ウィーン古典派音楽を代表する大作曲家ハイドンは、104曲の交響曲をはじめ、80曲にも及ぶ弦楽四重奏曲の他、ピアノ三重奏曲も40数曲残しており、今日は短調で書かれた第40番を、現代最高のピアニストの一人、アンドラーシュ・シフ(1953～)のピアノ、妻でもある名手塩川悠子(1946～)のヴァイオリン、ロシア出身の名チェリスト、ボリス・ペルガメンシコフ(1948～2004)による息のあった名演奏でお聴きください。ロシア五人組のひとりで、ロシア国民主義の樹立に貢献した作曲家ポロディンは、作品数は少ないものの、印象的な名曲を多く残しました。弦楽四重奏曲第2番は第3楽章の「夜想曲」が特に有名で、ロシア室内楽作品の傑作のひとつとして知られています。演奏する東京クアルテットは、桐朋学園大学の卒業生で、齋藤秀雄門下生の日本人4名で1969年に結成されました。1981年に第1ヴァイオリンの原田幸一郎が脱退したあと、ピーター・ウンジャンを迎え、その後は押しも押されぬ名クアルテットとして活躍しましたが、2013年6月、44年にわたる歴史に終止符を打ち、解散しました。今日は黄金期の名演奏を堪能してください。モーツァルトのフルート四重奏曲第1番は、きびきびとした躍動感にあふれた前後楽章に、しみじみとしたアダージョ楽章を挟んだ珠玉の作品です。バイエルン放送響の首席を歴任したスロベニア出身の名女流フルーティスト、イレーナ・グラフェナウアー(1957～)、オランダを代表する名ヴァイオリニストイサヘル・ファン・クーレン(1966～)、ドイツ生まれで現代最高のヴィオリストのひとり、タベア・ツインマーマン(1966～)、そしてハイドンでも演奏していたボリス・ペルガメンシコフのチェロによる演奏です。最後は、この分野の最高傑作として知られる、ブラームスのピアノ五重奏曲へ短調です。イギリス出身で、1986年のチャイコフスキー国際コンクールの優勝者であるバリー・ダグラス(1960～)、ポーランド出身の実力派ヴァイオリニスト、コンスタンティ・クルカ(1947～)、韓国出身の名女流奏者、チー・ユン(1970～)、日本を代表する名ヴィオリスト、今井信子(1943～)、そしてフィンランド出身の世界的チェリストアルト・ノラス(1942～)という、名手たちによるアンサンブルの妙技をお楽しみ下さい。(中川)

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)： ピアノ三重奏曲第40番(26番)嬰へ短調Hb.XV:26

アンドラーシュ・シフ(ピアノ)／塩川悠子(ヴァイオリン)／ボリス・ペルガメンシコフ(チェロ)
(1992.3.9 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

アレクサンドル・ポロディン(1833～1887)： 弦楽四重奏曲第2番二長調

東京クアルテット
(1993.9.6 モントルー、コレジオ・パピオ教会でのLive)

*** 休憩 ***

ウオルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～1791)： フルート四重奏曲第1番二長調K.285

イレーナ・グラフェナウアー(フルート)／イサベル・ファン・クーレン(ヴァイオリン)
タベア・ツインマーマン(ヴィオラ)／ボリス・ペルガメンシコフ(チェロ)
(1989.5.12 サントリーホールでのLive)

ヨハネス・ブラームス(1833～1897)： ピアノ五重奏曲へ短調Op.34

バリー・ダグラス(ピアノ)／コンスタンティ・クルカ(ヴァイオリン)／チー・ユン(ヴァイオリン)
今井信子(ヴィオラ)／アルト・ノラス(チェロ)
(2006.4.6 ワルシャワ、旧王宮大会議ホールでのLive)

曲 目 解 説

ハイドン：ピアノ三重奏曲第40番(26番)嬰へ短調Hb.XV:26

104曲の交響曲に代表されるように「交響曲の父」とも呼ばれるオーストリアの大作作曲家ハイドンは、室内楽の分野でも数多くの作品を残しています。40曲以上あるピアノ三重奏曲には偽作もあり、作品の順序が混乱した状態で出版されていたため、音楽学者のH.C.ロビンズ・ランドンが、これを整理・編集した校訂版を出版しました。今回お聴きいただく、それまでの第26番の曲は、ランドン版では第40番となっています。ピアノ三重奏曲第40番は、1794年から1795年にかけての、新作発表のための第2回目のロンドン・ツアー最後の数週間に作曲された第38番、第39番に続く3曲目の曲で、3曲は同時に出版されました。ハイドンは当時、ピアニストのレベッカ・シュローターという未亡人から、音楽のレッスン依頼を受けたのがきっかけで、恋人関係になりましたが、ハイドンがウィーンに戻ってからは、二人の関係はハイドンが亡くなるまで友人として続けました。3曲はシュローター未亡人に献呈されています。3曲中、唯一短調で書かれた第40番は、情熱的な第1、第3楽章と、交響曲第102番にも転用された美しい第2楽章を挟んだ構成になっています。

第1楽章 アレグロ 第2楽章 アダージョ・カンタービレ 第3楽章 テンポ・ディ・メヌエット

ボロディン：弦楽四重奏曲第2番二長調

ペテルブルク生まれのロシアの作曲家、ボロディンは、ムソルグスキーやリムスキー・コルサコフらとともにバラキレフを長とした、いわゆる「五人組」と呼ばれるロシア国民音楽運動の先駆者として活躍しましたが、少年時代から音楽への興味とともに化学に熱中し、将来化学者になるために医科大学を卒業する程でした。化学者になってからも作曲活動が続け、少ない作品数ながら、印象的な名曲を多く残しました。弦楽四重奏曲第2番二長調は、1881年7月23日に着手し、同年9月19日に完成、わずか約2ヶ月というスピードで書き上げられた作品で、初演は翌1881年2月7日に、ロシア音楽協会の演奏会で、ガルキン弦楽四重奏団によって行なわれました。その年の12月には、レオポルド・アウアー率いる弦楽四重奏団によって再演されています。楽譜は、ボロディンが亡くなった翌年の1888年に、ライプツィヒのベリヤーエフ社から出版されました。民族的色彩を前面に出しながら、ロシア特有の甘美なメロディが美しく、第3楽章の夜想曲は、単独でもしばしば演奏される名曲で、ロシアの室内楽作品を代表する傑作です。

第1楽章 アレグロ・モデラート 第2楽章 スケルツォ、アレグロ
第3楽章 ノットウルノ(夜想曲)、アンダンテ 第4楽章 アンダンテ～ヴィヴァーチェ

モーツァルト：フルート四重奏曲第1番二長調K.285

モーツァルトは、1777年、21歳のときに、母親とともにザルツブルクからパリに向かって旅行をしました。その途中、ドイツのマンハイムに立ち寄ったとき、オランダの裕福な商人ドウ・ジャンと出会いました。彼はアマチュアのフルート奏者でしたが、200フロリンの報酬で、1777年12月はじめに5曲のフルートの作曲依頼を受けました。今日第2番と呼ばれるフルート協奏曲はオーボエ協奏曲をフルート用に編曲したものでしたが、1777年12月25日から翌1778年2月14日までの間に、フルート四重奏曲を3曲、フルート協奏曲を2曲完成させました。12月25日に最初に完成したのが、フルート四重奏曲第1番です。すがすがしい活気に満ちた第1、第3楽章に、セレナータ風の情緒たつぷりの美しさを持った第2楽章を挟んだ、珠玉の名曲です。

第1楽章 アレグロ 第2楽章 アダージョ 第3楽章 ロンド

ブラームス：ピアノ五重奏曲へ短調Op.34

4曲の交響曲や管弦楽曲、協奏曲などの傑作で知られるドイツの大作作曲家ブラームスは、室内楽作品でも多くの名曲を生み出しています。ブラームスは1862年29歳の時に、弦楽四重奏にさらに1本チェロを加えた編成のへ短調の弦楽五重奏曲の作曲をはじめました。友人でヴァイオリンの大家ヨアヒムに意見を求めたところ、改訂を勧められたブラームスは、それを2台のピアノのためのソナタの形に書き直し、1864年2月に完成させました。その年の4月17日、ブラームス自身と友人のピアニスト、カール・タウジツヒのピアノで初演されましたが、たいした反響もなく、ブラームス自身も改訂の必要性を感じていたとき、クララ・シューマンからの手紙を受け取りました。そこには、「作品は素晴らしいが、2台のピアノのためでは内容からみて無理があり、変更してみてもどうか」と書かれていて、ブラームスはさらに曲をピアノ五重奏曲の形に直したのでした。曲は滞在していたバーデン＝バーデンで1864年10月に完成、1868年3月24日にパリのエラル音楽堂で公開初演されましたが、ブラームスは出席しませんでした。バーデン＝バーデンではヘッセン＝ルンペンハイム家の王妃アンナの御前でクララ・シューマンと、このソナタを演奏、深く感銘を受けたアンナに作品を献呈、さらにピアノ五重奏曲へ短調も彼女に献呈されました。メランコリックな味わいと激しい情熱など、ブラームスの本質が遺憾なく発揮された傑作です。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロツポ 第2楽章 アンダンテ・ウン・ポコ・アダージョ
第3楽章 スケルツォ、アレグロ 第4楽章 ポコ・ソステヌート～アレグロ・ノン・トロツポ